

平成30年度 工V系(社会環境工学科) 第6回 電磁気学 I

天野 浩

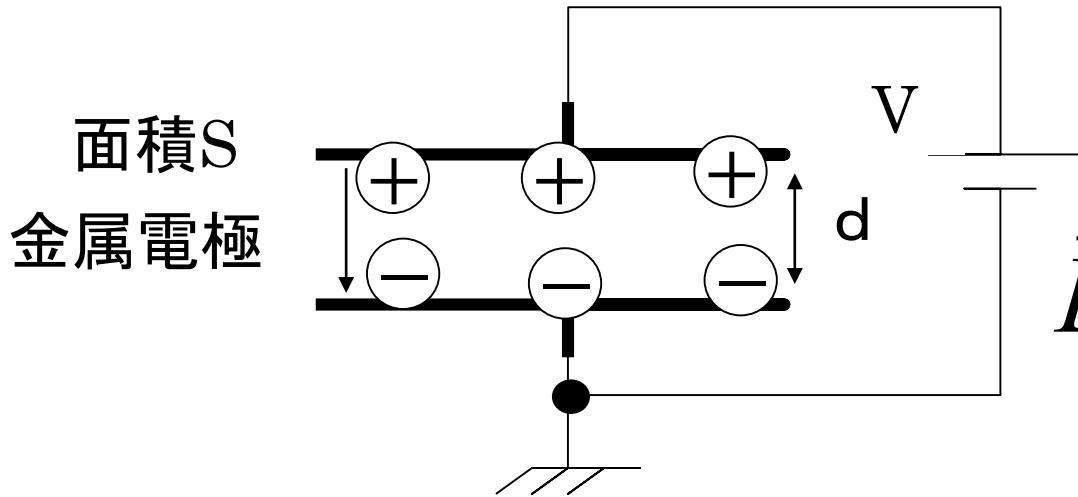
amano@nuee.nagoya-u.ac.jp

回	日程	テキスト章	内容
6	11月19日	第3章 誘電体を含む 静電界	3.1誘電体と誘電分極 3.2誘電体を含む系の電界 3.3誘電体に蓄えられるエネルギー 3.4誘電体の境 界にはたらく力 3.5真空中および誘電体中の基本式 のまとめ

前回は、真空中(空気中)の静電容量の基礎を学んだ。今回は誘電体の誘電率を学ぶ。

3.1 誘電体と誘電分極

真空中の場合の平行平板コンデンサ



電位

電界

$$\vec{E} = -\nabla \phi [V / m]$$

電束密度ベクトル

$$\vec{D} = \epsilon_0 \vec{E} [C / m^2]$$

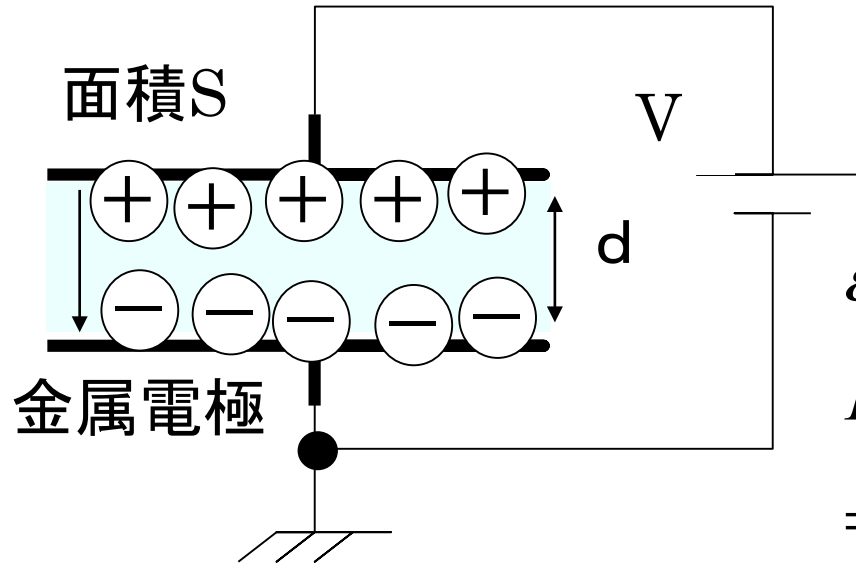
電極の全電荷

$$Q = C \cdot V = D \cdot S [C]$$

$$E = \frac{V}{d}, C = \epsilon_0 \frac{S}{d}$$

3.1 誘電体と誘電分極

電極間に誘電体を挟んだ時、誘電率が ϵ_0 から ϵ に変わったとする。



$\epsilon = \epsilon_r \epsilon_0$ として、 ϵ_r を**比誘電率**と呼ぶ。
X線領域以外では、 $\epsilon_r > 1$

$$\epsilon_r = 1 + (\epsilon_r - 1)$$

$$\vec{D} = \epsilon \vec{E} = \epsilon_0 \epsilon_r \vec{E} = \epsilon_0 \{1 + (\epsilon_r - 1)\} \vec{E}$$

$$= \epsilon_0 \vec{E} + \epsilon_0 (\epsilon_r - 1) \vec{E}$$

$$= \epsilon_0 \vec{E} + \vec{P} [C/m^2]$$

Pを分極ベクトルと呼ぶ。単位は $[C/m^2]$

$$\vec{P} = \epsilon_0 (\epsilon_r - 1) \vec{E} [C/m^2]$$

3.1 誘電体と誘電分極

* 誘電分極とは何か？

→ 物質内部で、電氣的に中性であったものが、電荷が発生する現象。



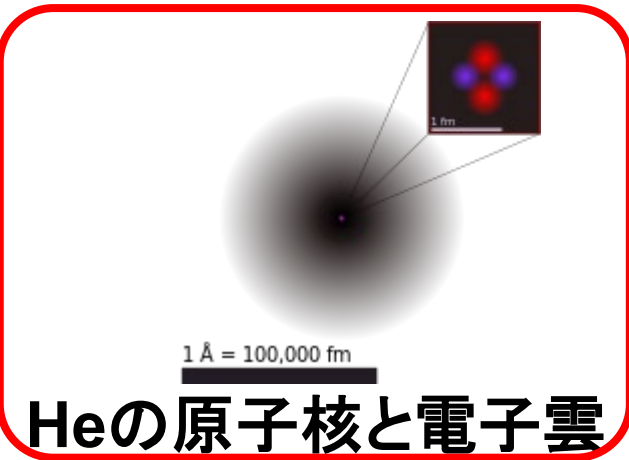
$$\vec{P} = \sum_i \vec{m}_i$$

$$\vec{m} = q\vec{\ell}$$

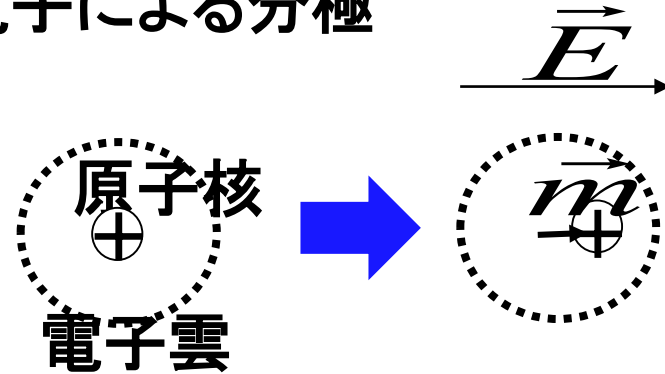
電気双極子

ℓ は微小長さ、 m は電気双極子モーメント

物質内部に発生する電気双極子の総和が分極 P



1. 電子による分極



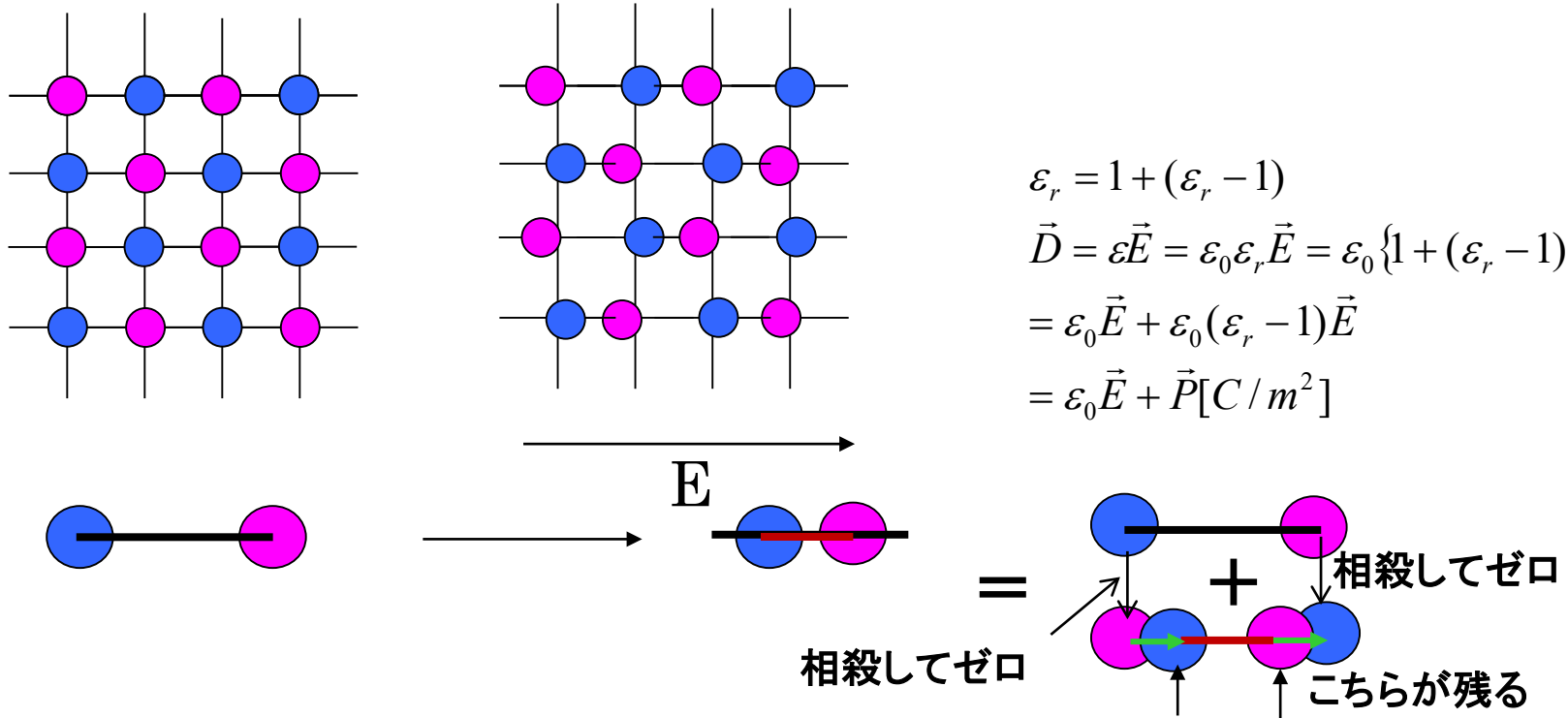
* 各原子における正電荷(原子核)と負電荷(電子)の重心位置のずれにより、電気双極子が発生する。

* 特徴: 電子は、原子核に強く束縛されているので、それほど大きくない。

* 電子は軽いので高い周波数の電磁波にも対応する。

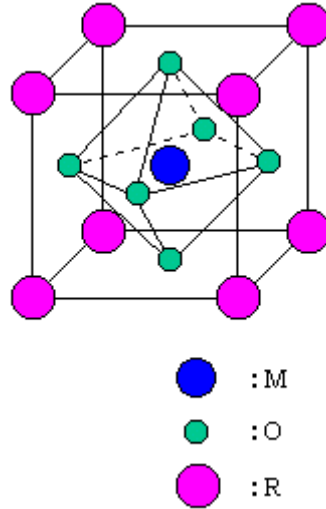
2. イオン分極

NaClのような結晶を考える。 Na:正イオン(青) Cl:負イオン(赤紫)



元の格子+ずれた格子位置に電気双極子を配置することと同じ。
 特徴: 格子振動に対応するので、赤外領域まで追隨する。

強誘電体材料の例

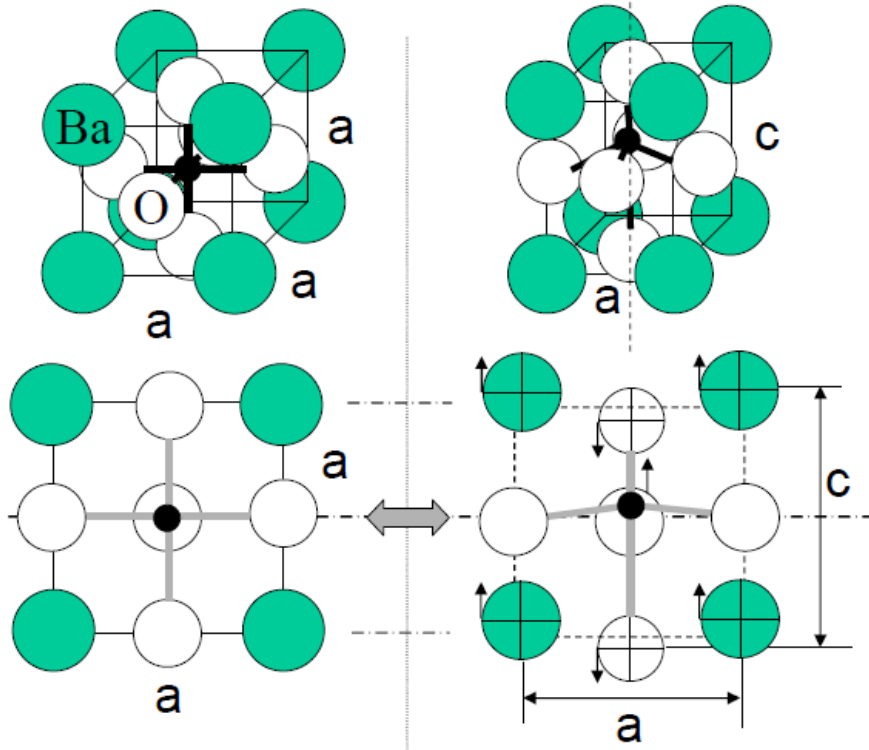


ペロブスカイト構造

例 BaTiO_3 (チタン酸バリウム)
 RMO_3

強誘電体・圧電体理解に関する図集
2007年1月版
楠本慶二著

Tiの位置がずれているために
自発分極が生じる



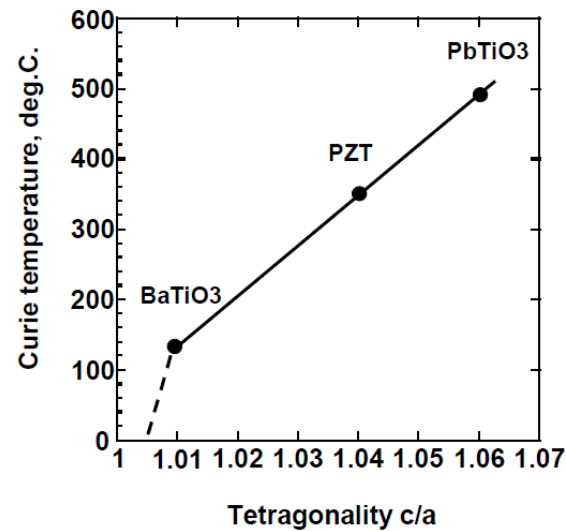
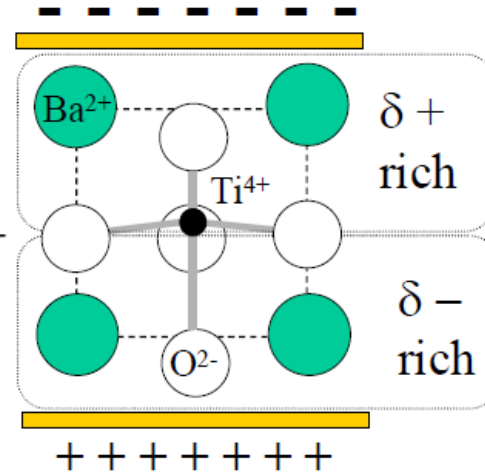
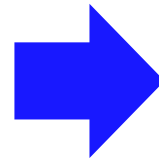
立方晶

正方晶

分極なし

分極あり

正方晶と立方晶の
相転移温度



強誘電体材料の特徴

分極量 (P)

自発分極 (P_s)

残留分極 (P_r)

抗電界 (E_c)

(-)

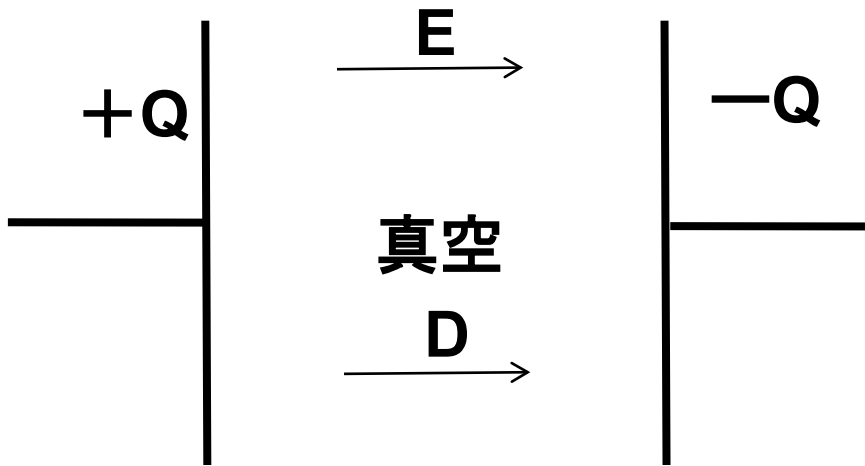
電界強度 (E) (+)

記憶素子として使える

強い電界が加わると、
分極が元に戻らない。
→ FeRAMの原理

典型的な強誘電体材料の分極量Pの電界強度E依存性

3.2 誘電体を含む系の電界



真空中の電界ベクトル

$$\vec{E}$$

真空中の電束密度ベクトル

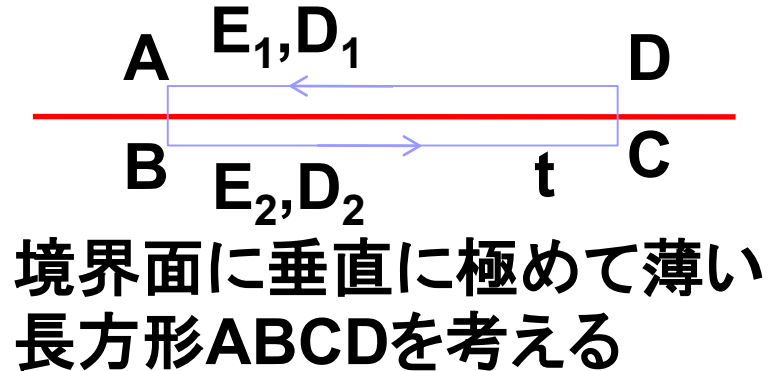
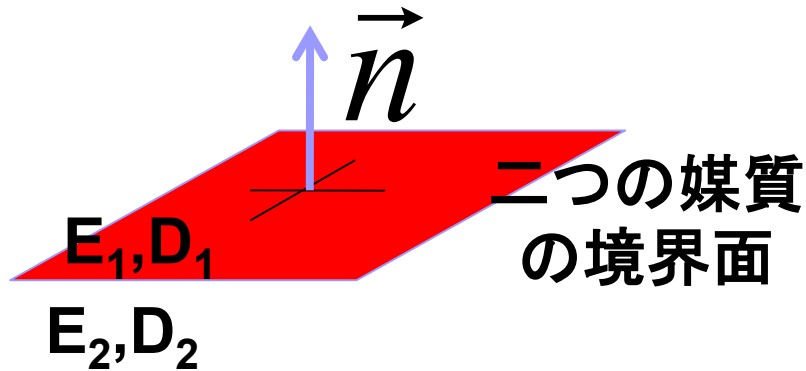
$$\vec{D}$$

誘電体中の電界ベクトル



誘電体中の電束密度ベクトル

異なる誘電体が接している場合の電界の求め方



電界を周回積分したらゼロのはず $\oint_{ABCD} \vec{E} \cdot d\vec{\ell} = 0$

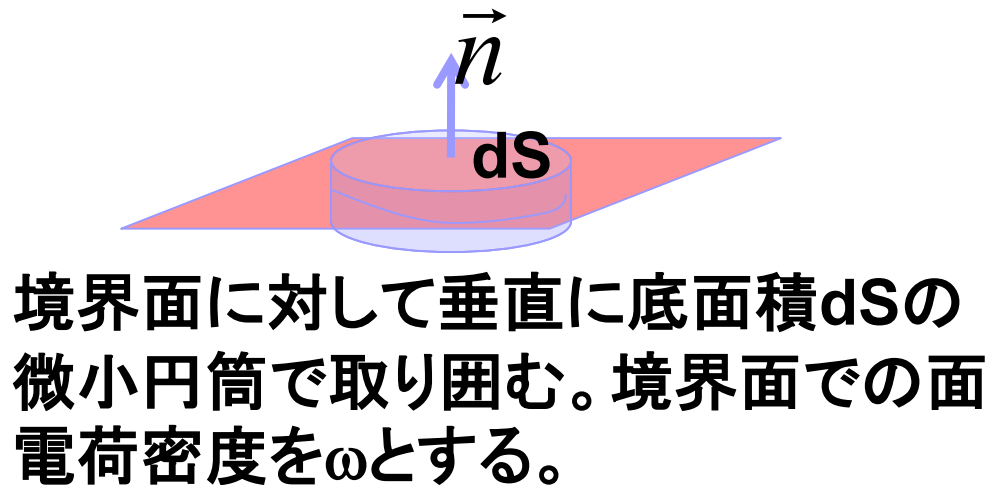
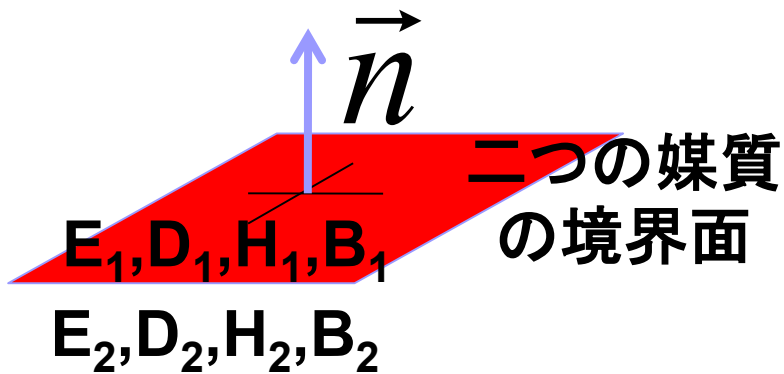
ABCDは極めて薄いので、ABの積分およびCDの積分は無視する。
単位接線ベクトルを \vec{t} とする。

$$\oint_{ABCD} \vec{E} \cdot d\vec{\ell} = BC \cdot \vec{t} \cdot \vec{E}_2 - DA \cdot \vec{t} \cdot \vec{E}_1 = 0$$

BC=DAなので $\vec{E}_1 \cdot \vec{t} = \vec{E}_2 \cdot \vec{t}$

二つの誘電体の界面における電界 E_1, E_2 の接線成分は等しい。

異なる絶縁体が接している場合の電束密度の求め方



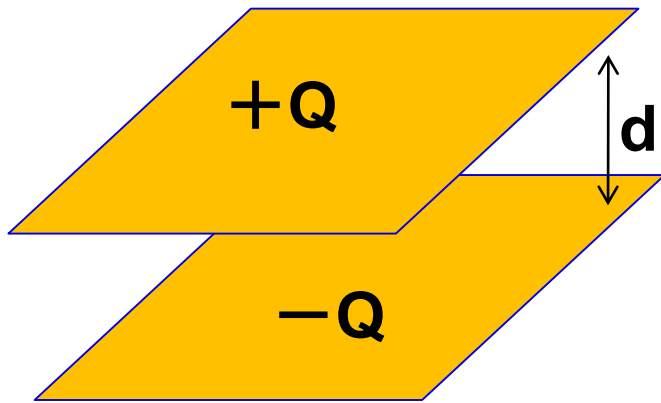
ガウスの法則より

$$\begin{aligned} \oiint_S \vec{D} \cdot d\vec{S} \\ &= \vec{D}_1 \cdot \vec{n} dS - \vec{D}_2 \cdot \vec{n} dS \\ &= \omega \cdot dS \\ \therefore (\vec{D}_2 - \vec{D}_1) \cdot \vec{n} &= -\omega \end{aligned}$$

境界面に電荷がない場合 $(\vec{D}_2 - \vec{D}_1) \cdot \vec{n} = 0$

誘電体境界面上における電束密度 D_2, D_1 の法線成分は等しい。

Q: 真空中に二つの無限平行平板導体があり、それぞれ $+Q[C/m^2]$ 、 $-Q[C/m^2]$ の電荷を与えて距離 $d[m]$ だけ放すと、導体間の静電容量はどれくらいか？



$$\oiint_S \vec{E} \cdot \vec{n} dS = \frac{1}{\epsilon} \Sigma q$$

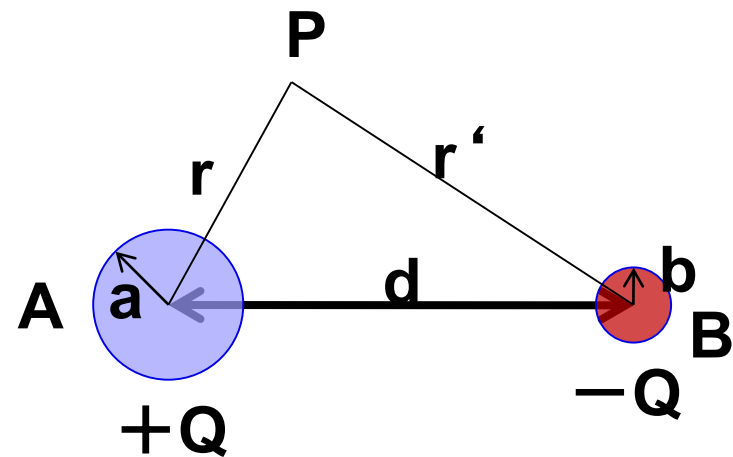
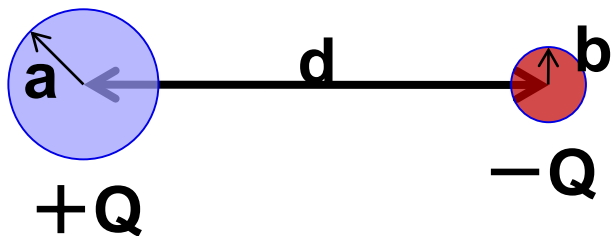
平板間内の電界は、ガウスの法則より

$$E = \frac{Q}{\epsilon_0}$$

$$V = -\int_d^0 \frac{Q}{\epsilon_0} dr = \frac{Q}{\epsilon_0} d$$

$$\therefore C = \frac{Q}{V} = \epsilon_0 \frac{1}{d} [F / m^2]$$

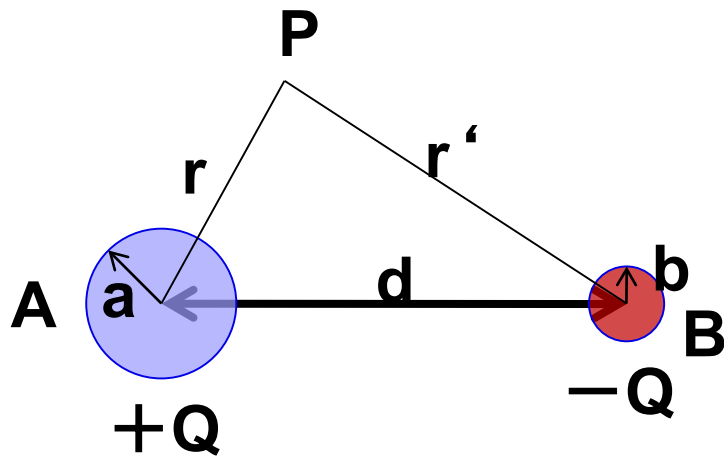
Q 下の図のように球の半径が a [m]および b [m]の二つの導体球A,Bが間隔 d [m]だけ離れて置かれている。それぞれに $+Q$ [C]、 $-Q$ [C]の電荷を与えたとき、静電容量を求めなさい。



AがPに及ぼす電位、およびBがPに及ぼす電位を考える。

$$V_P = -\int_{\infty}^r \frac{Q}{4\pi\epsilon_0 r^2} dr - \int_{\infty}^{r'} \frac{-Q}{4\pi\epsilon_0 r'^2} dr'$$
$$= \frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \left(-\frac{1}{r} + \frac{1}{r'} \right)$$

Q: 下の図のように球の半径がa[m]およびb[m]の二つの導体球A,Bが間隔d[m]だけ離れて置かれている。それぞれに+Q[C]、-Q[C]の電荷を与えたとき、静電容量を求めなさい。



A表面の電位 V_A は

$$V_A = \frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \left(-\frac{1}{a} + \frac{1}{d-a} \right)$$

B表面の電位 V_B は

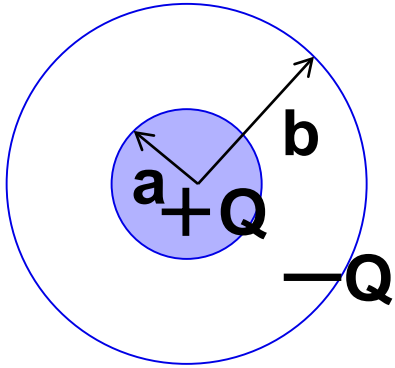
$$V_B = \frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \left(-\frac{1}{d-b} + \frac{1}{b} \right)$$

従って、AとBの電位差 V_{AB} は

$$V_{AB} = V_A - V_B = \frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \left(-\frac{1}{a} - \frac{1}{b} + \frac{1}{d-a} + \frac{1}{d-b} \right)$$

$$\therefore C = \frac{Q}{V_{AB}} = \left| \frac{4\pi\epsilon_0}{\left(-\frac{1}{a} - \frac{1}{b} + \frac{1}{d-a} + \frac{1}{d-b} \right)} \right| [F]$$

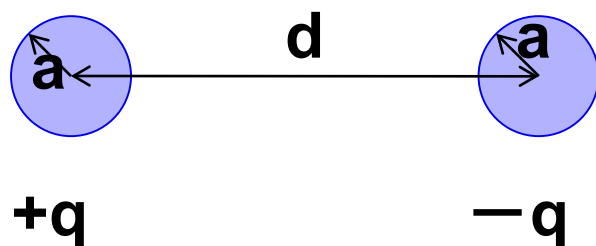
Q: 下の図のように内球の半径がa[m]、外球の半径がb[m]の同心球導体がある。それぞれに+Q[C]、-Q[C]の電荷を与えたとき、静電容量を求めなさい。



$$V = -\int_b^a \frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \frac{1}{r^2} dr = \frac{Q}{4\pi\epsilon_0} \left(\frac{1}{a} - \frac{1}{b} \right) [V]$$

$$C = \frac{Q}{V} = \frac{4\pi\epsilon_0}{\left(\frac{1}{a} - \frac{1}{b} \right)} [F]$$

Q: 下の図のように半径 a [m]の無限に長い導線2本が間隔 d [m]で平行に配置されている。2本の導線それぞれに単位長さ当たり電荷 $+q$ [C/m]および $-q$ [C/m]を与えたときの単位長さ当たりの静電容量を求めなさい。



断面図

+qの方が作る電位

$$V = -\int_{\infty}^r \frac{q}{2\pi\epsilon_0} \frac{1}{r} dr$$

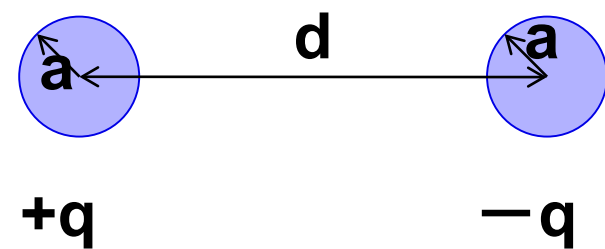
-qの方が作る電位

$$V = \int_{\infty}^{r'} \frac{q}{2\pi\epsilon_0} \frac{1}{r'} dr'$$

従って、合計の電位は

$$V = \frac{q}{2\pi\epsilon_0} \log\left(\frac{r'}{r}\right) [V]$$

Q9-4 下の図のように半径 a [m]の無限に長い導線2本が間隔 d [m]で平行に配置されている。2本の導線それぞれに単位長さ当たり電荷 $+q$ [C/m]および $-q$ [C/m]を与えたときの単位長さ当たりの静電容量を求めなさい。



断面図

+qの方の表面電位

$$V_1 = \frac{q}{2\pi\epsilon_0} \log\left(\frac{d-a}{a}\right) [V]$$

-qの方の表面電位

$$V_2 = \frac{q}{2\pi\epsilon_0} \log\left(\frac{a}{d-a}\right) [V]$$

従って二つの導線間の電位差は

$$V = V_1 - V_2 = \frac{q}{\pi\epsilon_0} \log\left(\frac{d-a}{a}\right) [V]$$

$$\therefore C = \frac{\pi\epsilon_0}{\log\left(\frac{d-a}{a}\right)} [F / m]$$

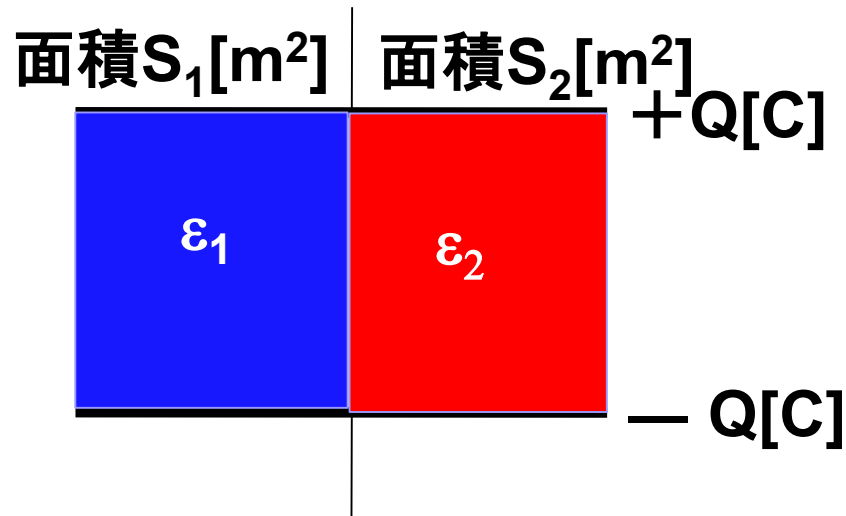
Q: (1)真空中に点電荷 q [C]があるとき、距離 r [m]離れた点の電束密度ベクトル D [C/m²]を求めなさい。
(2)点電荷の周りを比誘電率 ϵ_r の物質で満たした場合の電束密度ベクトル D [C/m²]を求めなさい。

$$\oiint_S \vec{D} \cdot d\vec{S} = \sum q \quad \text{ガウスの法則}$$

(1),(2)とも答えは同じ

$$D = \frac{q}{4\pi r^2} [C / m^2]$$

Q: 図のように、誘電率 ϵ_1 の材料を面積 S_1 [m²], 誘電率 ϵ_2 の材料を面積 S_2 [m²], 平行平板コンデンサを二種類の誘電体で満たして、極板に電荷+Q[C]、-Q[C]を与えたとき、このコンデンサの誘電率 ϵ を求めなさい。

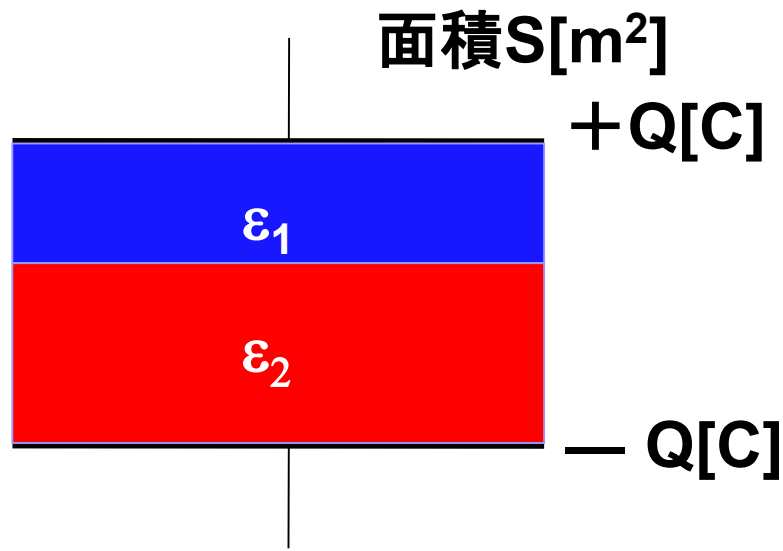


この場合は、
電界Eは材料1と2で等しい。

$$\begin{aligned} Q &= D \times (S_1 + S_2) \\ &= \epsilon E \times (S_1 + S_2) \\ &= \epsilon_1 E S_1 + \epsilon_2 E S_2 \end{aligned}$$

$$\epsilon = \frac{S_1}{S_1 + S_2} \epsilon_1 + \frac{S_2}{S_1 + S_2} \epsilon_2$$

Q: 図のように、面積 $S[\text{m}^2]$ の平行平板コンデンサを誘電率 ϵ_1, ϵ_2 の二種類の誘電体で満たして、極板に電荷 $+Q[\text{C}]$ 、 $-Q[\text{C}]$ を与えたとき、各誘電体内の電界を求めなさい。



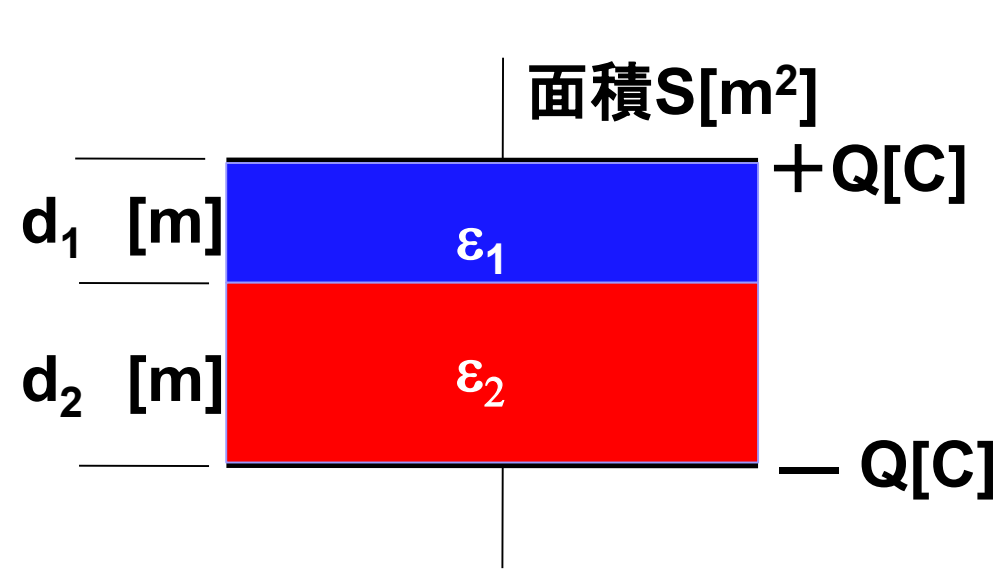
電束密度ベクトル D で考える。

$$D = \epsilon_1 E_1 = \epsilon_2 E_2 = Q/S$$

$$E_1 = \frac{Q}{\epsilon_1 \cdot S} [V/m]$$

$$E_2 = \frac{Q}{\epsilon_2 \cdot S} [V/m]$$

Q: 前問において、合成の静電容量をC、それぞれの誘電体の厚さを d_1, d_2 とする。CをSと $d_1, d_2, \epsilon_1, \epsilon_2$ を用いて表しなさい。



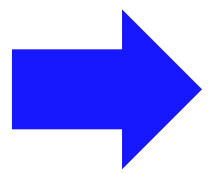
$$V = - \int_{\text{基準位置}}^{\text{対象となる位置}} \vec{E} \cdot d\vec{r}$$

$$D = \epsilon_1 E_1 = \epsilon_2 E_2 = Q/S$$

$$E_1 = \frac{Q}{\epsilon_1 \cdot S} [V/m]$$

$$E_2 = \frac{Q}{\epsilon_2 \cdot S} [V/m]$$

$$\begin{aligned}
 V &= - \int_{d_1}^0 \frac{Q}{\epsilon_1 S} dx - \int_{d_1+d_2}^{d_1} \frac{Q}{\epsilon_2 S} dx \\
 &= \frac{Q}{S} \frac{d_1}{\epsilon_1} + \frac{Q}{S} \frac{d_2}{\epsilon_2} \\
 &= \frac{Q}{S} \frac{d_1 \epsilon_2 + d_2 \epsilon_1}{\epsilon_1 \epsilon_2}
 \end{aligned}$$



$$C = \frac{Q}{V} = \frac{S \epsilon_1 \epsilon_2}{d_1 \epsilon_2 + d_2 \epsilon_1} [F]$$

Q: (1) 比誘電率 ϵ_r が1200、厚さ1.00[mm]の物質を、面積10.0[cm²]の銅板2枚に挟んだ。静電容量を計算しなさい。真空の誘電率は $\epsilon_0=8.85 \times 10^{-12}$ [F/m]とする。
(2) 銅板にこの物質を挟む時、0.10[mm]の隙間ができた。静電容量はどうなるか？

$$(1) \quad C = \epsilon \frac{S}{d} = 8.85 \times 10^{-12} \times 1200 \times \frac{10 \times 10^{-4}}{10^{-3}} = 10.6[nF]$$

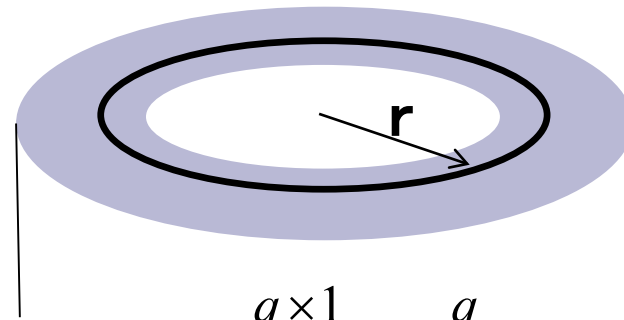
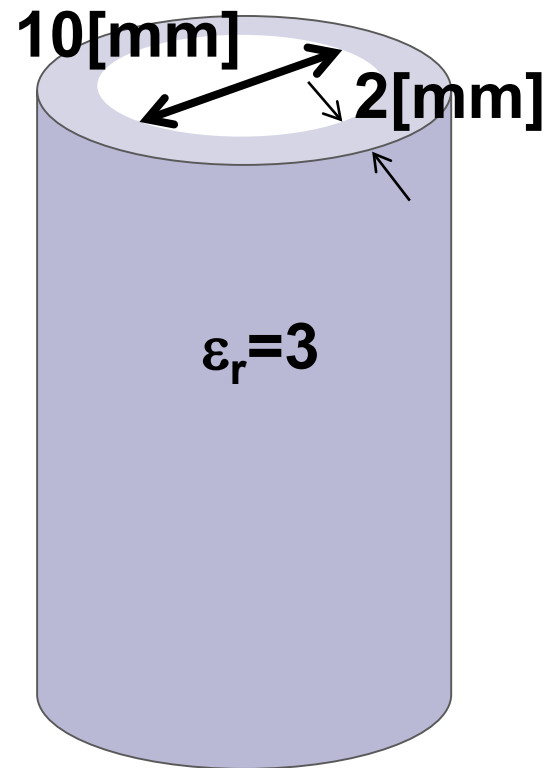
$$(2) \quad C = \frac{S\epsilon_1\epsilon_2}{d_1\epsilon_2 + d_2\epsilon_1} = \frac{10 \times 10^{-4} \times 8.85 \times 10^{-12} \times 1200 \times 8.85 \times 10^{-12}}{10^{-3} \times 8.85 \times 10^{-12} + 0.1 \times 10^{-3} \times 8.85 \times 10^{-12} \times 1200} \\ = 87.8[pF]$$

Q: 内径10[mm]、肉厚2[mm]の無限塩ビパイプの内面と外面をアルミニウムでコーティングした。1[m]あたり、内面及び外面に電荷をそれぞれ+q[C/m]、-q[C/m]を与えた時、単位長さ当たりの静電容量C[F/m]を求めなさい。塩ビの比誘電率を3、真空の誘電率を 8.85×10^{-12} [F/m]として計算しなさい。

ガウスの法則

$$\oiint_S \vec{D} \cdot d\vec{S} = \sum q$$

$$V = - \int_{\text{基準位置}}^{\text{対象となる位置}} \vec{E} \cdot d\vec{r}$$

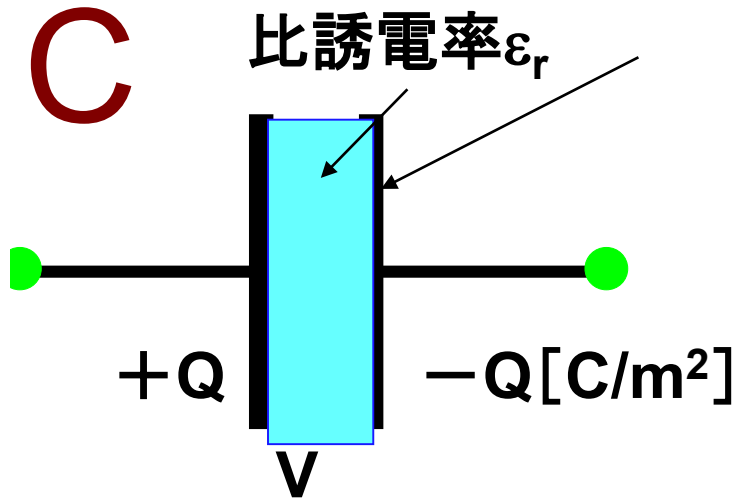


$$D = \frac{q \times 1}{2\pi r \times 1} = \frac{q}{2\pi r}$$

$$V = - \int_6^5 \frac{q}{2\pi\epsilon r} dr = \frac{q}{2\pi\epsilon} \ln\left[\frac{6}{5}\right]$$

$$C = \frac{q}{V} = \frac{2\pi\epsilon}{\ln\left[\frac{6}{5}\right]} = \frac{2 \times 3.14 \times 8.85 \times 10^{-12} \times 3}{\ln\left[\frac{6}{5}\right]} = 0.915 [\text{nF} / \text{m}]$$

3.3 誘電体に蓄えられるエネルギー



単位面積当たりの電荷 $+Q$ 、 $-Q [C/m^2]$ 、
面積 $S [m^2]$ 、電極間距離 $d [m]$ とする。

誘電体がある場合の電極間の電界 $E [V/m]$ と
真空の場合の電界 E_0 は $[V/m]$ は、

$$E = \frac{Q}{\epsilon_r \epsilon_0} = \frac{E_0}{\epsilon_r} \quad \rightarrow \quad V = \frac{E_0}{\epsilon_r} \cdot d$$

静電容量 $C [F]$ は、 $C = \epsilon_0 \epsilon_r \frac{S}{d}$

従って、静電エネルギーは $\frac{1}{2} CV^2 = \frac{1}{2} \epsilon_0 \epsilon_r \frac{S}{d} \left(\frac{E_0}{\epsilon_r} \cdot d \right)^2 = \frac{1}{2} \epsilon_0 E_0^2 \frac{1}{\epsilon_r}$

真空中の単位体積当たりの静電エネルギーは $\frac{1}{2} \epsilon_0 E^2 [J/m^3]$

従って、比誘電率 ϵ_r の誘電体に蓄えられるエネルギーは $\frac{1}{\epsilon_r}$ に減少

3.4 誘電体の境界面に働く力

誘電体中にある点電荷 Q が作る電界は
真空の誘電率 ϵ_0 を $\epsilon_0\epsilon_r$ に置き換える。

$$\vec{E} = \frac{Q}{4\pi\epsilon_0\epsilon_r r^2} \vec{e}_r = \frac{Q}{4\pi\epsilon r^2} \vec{e}_r$$

r方向の単位ベクトル

電界が境界面に垂直の時

誘電体境界面上における電束密度 D_2, D_1 の法線成分は等しい。

界面が力を受けて δx だけ動いたとすると、
境界面単位面積当たりのエネルギーの変化は

$$\begin{aligned} \delta W &= \frac{1}{2} (\vec{E}_1 \cdot \vec{D}_1 - \vec{E}_2 \cdot \vec{D}_2) \delta x \\ &= \frac{1}{2} \left(\frac{1}{\epsilon_1} - \frac{1}{\epsilon_2} \right) D^2 \delta x \end{aligned}$$

$$\text{力 } F = -\frac{\delta W}{\delta x} = -\frac{1}{2} \left(\frac{1}{\epsilon_1} - \frac{1}{\epsilon_2} \right) D^2$$

誘電率の大きい方が小さい方に引き込まれる

3.4 誘電体の境界面に働く力

誘電体中にある点電荷 Q が作る電界は
真空の誘電率 ϵ_0 を $\epsilon_0\epsilon_r$ に置き換える。

$$\vec{E} = \frac{Q}{4\pi\epsilon_0\epsilon_r r^2} \vec{e}_r = \frac{Q}{4\pi\epsilon r^2} \vec{e}_r$$

r方向の単位ベクトル

電界が境界面に平行の時

二つの誘電体の界面における電界 E_1, E_2 の接線成分は等しい。

界面が力を受けて δx だけ動いたとすると、
境界面単位面積当たりのエネルギーの変化は

$$\begin{aligned} \delta W &= \frac{1}{2} (\vec{E}_1 \cdot \vec{D}_1 - \vec{E}_2 \cdot \vec{D}_2) \delta x \\ &= \frac{1}{2} (\epsilon_1 - \epsilon_2) E^2 \delta x \end{aligned}$$

$$\text{力 } F = -\frac{\delta W}{\delta x} = -\frac{1}{2} (\epsilon_1 - \epsilon_2) E^2$$

誘電率の小さい方が大きい方に引き込まれる

3.5 真空中および誘電体中の基本式のまとめ

$$\oiint_S \epsilon \vec{E} \cdot d\vec{S} = \sum_k Q_k, \oiint_S \vec{D} \cdot d\vec{S} = \sum_k Q_k, \iiint_V \epsilon \vec{E} \cdot d\vec{S} = \iiint_V \rho dV, \oiint_S \vec{D} \cdot d\vec{S} = \iiint_V \rho dV$$

$$\nabla \cdot (\epsilon \vec{E}) = \rho, \nabla \cdot \vec{D} = \rho$$

$$\epsilon_r = 1 + (\epsilon_r - 1)$$

$$\vec{D} = \epsilon \vec{E} = \epsilon_0 \epsilon_r \vec{E} = \epsilon_0 \{1 + (\epsilon_r - 1)\} \vec{E}$$

$$= \epsilon_0 \vec{E} + \epsilon_0 (\epsilon_r - 1) \vec{E}$$

$$= \epsilon_0 \vec{E} + \vec{P} [C/m^2]$$

$$\nabla \cdot \nabla V = \frac{\partial}{\partial x} (\nabla V)_x + \frac{\partial}{\partial y} (\nabla V)_y + \frac{\partial}{\partial z} (\nabla V)_z$$

$$= \frac{\partial}{\partial x} \left(\frac{\partial V}{\partial x} \right) + \frac{\partial}{\partial y} \left(\frac{\partial V}{\partial y} \right) + \frac{\partial}{\partial z} \left(\frac{\partial V}{\partial z} \right)$$

$$= \frac{\partial^2 V}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 V}{\partial y^2} + \frac{\partial^2 V}{\partial z^2}$$

$$= \Delta V = -\frac{\rho}{\epsilon} \quad \Delta: \text{ラプラシアン}$$

真空中は $\epsilon = \epsilon_0$, 誘電体中は $\epsilon = \epsilon_0 \epsilon_r$ (或いは真空中は $\epsilon_r = 1$)